

The 19th Art Film Festival of Aichi Arts Center

「アートフィルム・フェスティバル」は、映像表現の新たな可能性を切り拓く作品を、実験映画、ビデオ・アート、ドキュメンタリー、自主制作映画など、既存のジャンル区分を横断する視点からセレクトした特集上映会です。映画はかつて、撮影所で習練を積んだ者のみが監督を務めることが出来る世界でしたが、現在活している映画監督の多くが自主制作の現場から輩出されている様に、映像を取り巻く状況は大きく変化しています。実験映画の作家や映画監督が現代美術の領域で発表を行ったり、美術家が映画監督として活躍するケースも生まれているように、創作の現場ではジャンルを越境した動きを、しばしば目にすることが出来ます。この上映会が、こうした現代のヴィジュアルな表現を反映した、鑑賞と交流の場として機能することを願っています。

ドキュメンタリーの現在

今日のドキュメンタリーの源流ともいうべき「極北のナヌーク」(1922年)や「アラシ」(1934年)などを監督した、ロバートフラハティの生涯を通った「アラシ曲の小舟」(1934年)の整形手術の模様を中継するパフォーマンスによりセンセーションを巻き起こしたアーティスト・オルランを扱った「オルラン、肉体の芸術」、改裝工事に対する住民の反運動から、10年間に渡って閉鎖を争った美術館の、観客からは見ることが出来ない内側を捉えた「みんなのアムステルダム国立美術館」等々、ユニークかつ多様なドキュメンタリーの奥深い世界に触れられるプログラムです。



ウーバーハウゼン「みんなのアムステルダム国立美術館」2014年



カネタラシズメ「1944」(4分) 2008年

ザビラ「ザビラ」(1分) 2012年



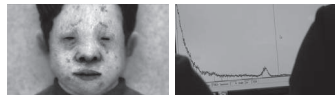
ザビラ「ザビラ」(1分) 2012年

ミアス・スタニス、フランク・ファン・ジッセル「[Open]」(5分) 2003年



天野天南「ウイライヴ」1994年 (Photo: 田島直樹)

ザビラ「ザビラ」(1分) 2012年 (Photo: 田島直樹)



大島渚「HAND SOAP」2008年

稲垣秀一「録音」2011年

「オーバーハウゼン国際短編映画祭」セレクション

ドイツのオーバーハウゼンで、毎年、春に開催されているこの映画祭は、1954年にスタートした。短編映画を対象とする最も歴史のあるものとして知られています。日本では、かつて山崎博司が受賞したことから、前衛的、実験的な作品が顕著される場という印象がありますが、現代映画が抱える問題に果敢に切り込んだ、硬派な作品の方が、むしろ多く取り上げられている映画祭といってもいいかもしれません。この特集では、「社会、権力、環境」と「アイデンティティとユーモア」の二つの切り口から、近年の主要な作品をまとめて紹介します。併せて愛知芸術文化センターオリジナル映像作品より、「オーバーハウゼン」に出品を果たした4本の上映もいたします。

同時開催

「インター・カレッジ・アニメーション・フェスティバル2014」(ICAF2014)

2014年12月6日[土] 13:00-
愛知芸術文化センター12F アートスペースA (入場無料)

アニメーションを専門的に学ぶことができる教育機関が推薦する学生作品を集めた、学生のための本格的なアニメーション・フェスティバルとして、今年で第12回目を迎えます。名古屋では10回目の節目となった2012年、当センターで特別上映として初め開催されました。当節で3回目となる今回は、「各校選抜プログラム」「実行委員会セレクションプログラム」「名古屋特別トワイベント」の三部構成で行います。

主催：インター・カレッジ・アニメーション・フェスティバル
共催：愛知美術院、日本アニメーション協会(JAA)、日本アニメーション学会(JASA)
http://www.icafe.net/



中島康平「1944」(4分) 2008年、多摩美術大学「ICAF2014」観客賞受賞

映像アートの軌跡 Since 1964

東京オリンピックの開催や、新幹線の開通から50年という節目に当たることから、今、1964年という年が改めて注目を集めています。この年はまた、無言で伝播された作品はすべて上映するという、インディペンデント映画を対象にした国際的な映画祭「フィルム・アンデパンダン1964」が、日本で初めて開催されたことも記録されるものといえるでしょう。後に映画監督として活躍する大林実彦から、実験映画、ビデオ・アートで先駆的な活動を続ける稲村隆彦、戦後の新派美術を代表する赤瀬川原平、先駆的パフォーマンス・アーティスト風倉彪、[グループ音楽]で反音楽的活動を展開した刃根康尚等々、ユニークな人材が集ったこのイベントを基点に、コレクション作品を通じて、現在まで続く実験的な映像と美術、音楽などのジャンルが交錯する軌跡を照らし出します。



高橋川原平「HOMOLOGUE」1964年



刃根康尚「2,880x1,00」1964年



石田昌一「7-年の軌跡」2001年

愛知芸術文化センター・オリジナル映像作品最新第23弾 三宅唱監督「THE COCKPIT」初公開

昨年開催された「あいちトリエンナーレ2013」映像プログラムでも「Playback」(2012年)が上映され、今、注目を集めている若手監督・三宅唱。運営重宝を絶つ映画評論家からも絶賛され、今後の日本映画を担う有望な新人という印象がある三宅ですが、彼の創作活動の原点に音楽が重要な位置を占めていることは、まだ広く知られていないではないでしょうか。愛知芸術文化センター・オリジナル映像作品最新第23弾として完成した、三宅の新作「THE COCKPIT」は、ラッパーのOMSBやbimらを迎え、彼らが楽曲制作する姿を捉えることから、日本のラップ・ミュージックを「身体」という切り口よりアプローチしたユニークな作品で、彼の新たな魅力に溢れたものとなっています。初公開のこの機会をお見逃しなく!



三宅唱「THE COCKPIT」2014年